

進化的視点からの言語変化と文法の複雑性

Language Change and Grammatical Complexity: An Evolutionary Perspective

野瀬 昌彦

Masahiko Nose

Abstract *Deutscher introduces an evolutionary tour of human languages in terms of historical and functional linguistics. He considers that language originated from “Me, Tarzan”. In the “Me Tarzan” primitive age, in which people had the motivation of communicating with each other. Afterwards, Human beings tried to make the “Me, Tarzan” combination more complicated by adding many grammatical forms and constructions. This study summarizes Deutscher’s explanation of the origin of language and language change, and moreover, points out that his evolutionary story lacks a rapid change of creole grammar (e.g. Tok Pisin). We can clarify the origin of language by using not only linguistics but also other disciplines such as biology, archeology, etc.*

Guy Deutscher. 2005. *The Unfolding of Language: An Evolutionary Tour of Mankind’s Greatest Invention*. New York, Henry Holt and Company.

キーワード：歴史言語学、言語の起源、言語変化、進化、複雑性

現在、世界には 6000 語もの言語が存在すると考えられているが、人類の話す言語（自然言語）がどのように発生し、その後どのように分離、伝播したのかという点については不明な点が多く、古くから現在までも言語研究の関心のひとつである。いわゆる「言語の起源」の問題は長い間、研究が科学的な方法がとられておらず、研究の進展がほとんどなされていなかった。しかし、2000 年以降、特に Hauser, Chomsky, & Fitch (2002) の論文以降に生成文法をはじめ、認知科学、霊長類学や遺伝学、コンピュータ科学などの他の分野からも多くの研究や成果が提案、提出されている。

言語の起源を考えると、人類の起源や進化のことをあわせて考える必要がある。人類の起源はアフリカで発生したという説が有力であるが、人間（ホモ＝サピエンス）がはじめて言語を使い出したのか、それともそれ以前の猿人の時代であったのかは、記録が残っていないため、不明である。言語の起源に関して、現在話さ

れている言語から過去の音声・音韻・形態を再構築する歴史言語学（または、比較言語学）や、他には遺伝学、生理学、考古学や霊長類学とも連携し、人類の言語の始まりを検証、探求しようとする研究が特に近年（2000年以降）なされてきており、その成果でもって言語の起源や展開のある程度は想定することができる。

書評の対象である本書（Deutscher 2005）では、言語のはじまり・起源に関するDeutscherの考えを整理しつつ、言語学を専門としない初心者にもわかるように書かれている。特に、話し言葉での「僕、ターザン（Me, Tarzan）」という初期の段階から始まる、Deutscherが考える文法の複雑化の過程を、進化的視点から述べている。特に、第7章の「言語の展開（The Unfolding of Language）」での議論を中心に、「僕、ターザン」の段階から、文法がいかに形成され、最終的に現在観察されるような言語になったかについて概観し、いくつかの根拠を与えている。Deutscherは本書で、言語学の素人にも理解できるように、言語学、特に歴史言語学の諸研究を紹介しつつ、進化的な観点からの自然言語の展開の道筋を示している。最初に、第7章の根幹部分を以下（1）に示す（p. 259）。

（1）人間の言語の文法発達に必要なもの：

- （i）言語を習得できるだけの人間の脳（脳は類推を可能とし、メタファーを形成することができる）
- （ii）我々に興味を持たせるような目的をもってコミュニケーションしたがる人類（人々）
- （iii）単純な物質的なモノと単純な行動を表す単語（つまり、名詞と動詞）
- （iv）順序（語順、形態素順）に関する自然な法則、それは我々の認知の深い部分から発する
- （v）いくばくかの時間（A bit of time）

（1）で指摘されている事項は、人間の文法発達に必要なものであり、いずれも言語学の分野では認知言語学（Cognitive Linguistics）や機能主義（Functionalism）の言語学で重視されている概念や規則である。例えば、（li）は文法化と関連し、（liv）はアイコン性（iconicity）や形態的関連性を言い変えたものである。さらに、（liii）は、機能主義言語学で強調される「名詞」と「動詞」の考え方に相当し、（lii）は語用論のグライスの公理（Gricean maxims）につながっている。最後の（lv）に関しては、この書評の後半部で議論する「文法の複雑性」の問題と深く関係する。

言語は、人類のすばらしい発明品であり、車輪や農業、食パンに並ぶほどの必要不可欠なものであり、言語こそが我々を人間たらしめるものである。しかしながら、言語は絶えず変化するものであり（言語変化、文法変化）、そして言語は新たに想像される（ピジン・クレオール、人工言語）ものである。言語の文法にはほとんどすべての言語が持つ普遍的な特徴（universals）が存在するとされる（Evans & Levinson 2009）。その普遍的な特徴とは、語と語が合わさって文になる点や、格

語尾、前置詞・後置詞の存在、時制マーカーという文法カテゴリーの存在などである。これらの普遍的と考えられる文法的特徴は「僕、ターザン」的な原始的なコミュニケーションの言語の段階では存在しなかったというのが Deutscher の主張である。この「僕、ターザン」的な段階は、人類（またはその前段階のネアンデルタール等々の猿人）に、発音する器官が存在していれば可能であったはずである。そのため、「僕、ターザン」の段階は 100 万年以上前まで遡れるかもしれない。Deutscher は人間の脳が発達し、アフリカを出て移動・伝播が始まった 4 万年から 5 万年前に言語の文法の複雑化が始まったのではないかと論じている。

言語の文法を考える際、生得性 (Innateness) の問題がある。つまり、文法が赤ちゃんとして生まれた時点で備わっているのか、それとも、あとから成長するにしたがって文法が習得されるものかという問題である。そして答えとしては、生まれる前に備わっている部分もあるし、生まれたあとで習得される部分もあるということである。「僕、ターザン」の段階での簡単な文法の時代には、その種の基本的な伝達の機能は生得的なものであったのではないかと考えられる。しかしながら、Deutscher が第 7 章で想定するような「僕、ターザン」から様々な文法特徴を言語が獲得していく進化のストーリーにおいて、獲得される文法特徴が生得的かどうかの切り分けは説明されていない。そもそも Deutscher 自身（及び機能・認知系の言語研究の分野）は、生得性についてはそれほど重視しておらず、生まれた後に言語をどのように習得していくかのみに興味があるように思われる。この Deutscher の言語の発達・進化の物語は、Tomasello (1999) が主張する社会行動の親から子への伝達や、それに伴う文化的進化と相性がよさそうである。

ここでは、特に第 7 章の言語の発達・進化のストーリー（「進化的なツアー」）について簡単にまとめる。Deutscher は「僕、ターザン」というターザンの言語習得のモデルを想定し、最初は単純で最小限のコミュニケーションから、最終的に通常の言語の文法が完成する過程を紹介している。まず、言語の文法に関して、認知言語学や機能言語学でよく主張されている考えやアイデアを 4 つ、ユーモアを交えて紹介している。以下にその 4 つを記す。

1. ジョルダン氏の原理 (Monsieur Jourdain's principle) :

これは、似ている概念を隣に、近くに配置する原理である。例えば、(おそらくは原始時代に) 誰かがマンモスに向けて槍を投げて、その結果、槍がマンモスに当たりマンモスがほえたという状況を言語にしようとする。その場合、「槍 投げる マンモス ほえる」という順序が自然で理想的となり、「マンモス 投げる 槍 ほえる」や「槍 マンモス ほえる 投げる」だと自然ではない。これは「槍」と「投げる」が意味的に関係が深いからであり、この原理は人間の認知活動の根幹をなすものである。

2. シーザーの原理 (Caesar's principle) :

このシーザーの原理はアイコン性の原理と関連するが、出来事を時系列に順番に述べる方が、より自然であるという原理である。つまり、実際の時間軸上で

起きた出来事を、言語にする際も、同様に同じ順番で述べるわけである。有名な例として、シーザーの「来た、見た、勝った (veni, vidi, vici)」という発言がある。これはシーザーの時間軸での行動と同じ順序で文が構成されている。

3. 'Don't be a bore' 「退屈な人であってはいけない」

この原理は、発話においてどのタイプの語が最初の部分に置かれるべきかという原理である。それほど重要ではなく、文脈から容易に理解できる事柄で、再度述べる必要がない話題・コトが最初に言及されるにふさわしいとされる。つまり、「少女が森に来て、少女がマンモスを見て、少女が走って、少女が木に登る」という発話があったとして、最初に少女が登場した時点で、あとの行為や行動が少女のものであることが明白な場合、少女を繰り返して述べるのではなく、「少女が森にきて、そこでマンモスを見て、びっくりして走って、木に登った」で十分、伝達の機能を満たしているのである。

4. “Me first” and “actor first” 「私が最初、活動する者が最初」

最後の原理はより自然な語順を考えるものであるが、ここでは、君や彼・彼女、その他の無性のものではなく、1人称の「私」が主語として最初の位置に現れるのがもっとも自然（主観性、もしくは名詞句階層の原理に相当）であり、または「太郎が花子を殺した」という文の場合、「花子を太郎が殺した」ではなく、動作主 (Agent) である「太郎が」主語として最初の位置に現れるのがより自然であるという原理である。これは情報の流れ、トピック・フォーカスなどの機能的・談話的な観点を端的に示してある。

以上、4つの基本原理に加え、「僕、ターザン」の段階から文法の複雑化が段階的になされると Deutscher は主張する。その複雑化とは、ダイクシス（これ・あれ、ここ・あそこ）の表現や、名詞や代名詞、接続詞や前置詞の追加、形容詞や具体的な動作動詞（歩く、走る、食べるなど）、副詞、抽象行為の動詞（思う、知る、嫌うなど）の追加などを経て、最終的には従属節の導入があり、現在の言語の文法が完成される。ただし、複雑な文法が完成した後、言語の文法がどう変化するののかについては、言及されていない（再び単純化に向かうと主張する研究がある）。

次に、「僕、ターザン」から最終的に「僕はターザンという名前です、はじめまして」に至る言語の複雑化（Deutscher が考える「言語の進化・展開」）であるが、この文法の複雑化・複雑性については、最近議論が行われている研究分野である（有名な研究として McWhorter (2001)、さらに最近の成果で Sampson, Gil & Trudgill (2009) の論文集等がある）。理論的には、英語であろうと、日本語であろうと、クレオール言語であろうと、すべての自然言語は同様に音声・音韻・形態・統語を総合して判断すると、同様に複雑であるはずである（「すべての言語は同様に複雑である」“All Languages are Equally Complex (ALEC)”；Deutscher 2009: 243）。しかし実際は、具体的に数値化して比較するのは非常に困難であるが、クレオール言語がそれほど複雑な文法を持っていないとの主張（McWhorter 2001）が支配的で、その原因として、クレオールが言語として使用されるようになってそれ

ほど時間が経っていない。つまり、文法が複雑になるには、長い時間が必要であると主張されている。

これに対して、Deutscher (p. 272-273) は文法が複雑になる理由の一つとして、当該言語の周囲に異なる言語や方言にさらされていないと複雑になると論じている。これは、孤立した地域で文法が複雑であるコーカサスの言語やオーストラリアのアボリジニの言語から想定することができる。もう一つの理由として、書き言葉がないと文法が複雑になる。これは、アフリカやアメリカインディアン言語、ニューギニア島の現地語がその例に入ると思われる。ただし、第一の孤立した地域の反例として、アラビア語やロシア語の文法の複雑性が挙げられるだろうし、オーストロネシア系の言語は、それが孤立した島で話される言語で書き言葉が存在しない言語にもかかわらず、複雑な文法を持たない。このように、反例がいくつか出せる点で、Deutscher の理由づけは決定的ではないと考えられる。Sampson, Gil & Trudgill (2009) の論文集の中には、文法特徴の統計的観察から言語毎の複雑性を数値化した研究が存在するが、その言語の過去の文法がどの程度複雑（または単純）で、どのような言語変化を経てきたのかを詳細に見る必要がある。

本書の筆者である Deutscher の専門がアッカド語であり、特に比較言語学や歴史言語学の記述や研究成果の観点から、人間の言語に関して考えられる進化・発展のシナリオを提示している。そのストーリーは音韻変化、形態変化、さらにメタファーや印欧語の歴史的変遷を言語学の初心者にもわかりやすく解説してある。そのため、本書を通読することで、印欧語を中心とした比較言語学や言語史、言語学史の勉強となると同時に、機能主義的、認知的な観点からの言語の進化・発展の考えを勉強することができる。本書には、参考文献と簡単な文法用語の解説もあり、関連する書籍や論文を参照することができ、最近多く出版されている「言語の進化」関連の書籍を読む際の手掛かりとなる。ただし、言語の進化に関する仮説や説明は、言語学を専門とする研究者のための記述ではない。そのため、進化のシナリオについては他の研究などと対照した上で、再検討する必要がある点と、印欧語を中心とした記述や想定が多いため、可能な限り、印欧語以外の言語の文法でも同様のことが言えるかどうか検討する必要がある。さらに、クレオール言語での振る舞いや進化・展開には、異なるシナリオ (McWhorter 2001) や研究が存在することを明記しておくべきである。

本書は、印欧語を中心とした言語学史や歴史言語学の流れを、2000 年以降注目されている「言語の進化、言語の起源」、「文法の複雑性」とあわせて理解することができる。同時に文法化やメタファーなど、認知言語学や機能主義言語学の基礎部分を含めた言語研究の流れを理解できる。ただし、言語の発展のシナリオは生成言語学者や霊長類学者、進化人類学者など、他の研究者の著作とあわせ読んで、慎重に再検討する必要がある。加えて、印欧語以外の言語の歴史的通時的な資料やクレオール言語の成立等の要因を、できる限り取り入れて新たなシナリオを構築するために、「自然の実験室」であるさまざまな言語（特に印欧語等旧世界ではなく、新世界の言語）の文法研究を観察することが不可欠である。文法の複雑性問題を考え

る上で、歴史言語学の重要性を指摘している点は正しいが、本書の主張だけでは不十分で、複雑性の定義や特徴を再考し、多くの言語データを実際に対照し、検証する必要がある。

参考文献

- Deutscher G. 2009. "Overall complexity": a wild goose chase? In: Sampson *et al.*: 243-251.
- Evans, N. & Levinson, S. C. 2009. The Myth of language universals: Language diversity and its importance for cognitive science. *Behavioral and Brain Sciences* 32: 429-492.
- Hauser, M., Chomsky, N., & Fitch, T. 2002. The faculty of language: what is it, who has it, and how did it evolve. *Science* 198: 1569-1579.
- McWhorter, J. H. 2001. The World's simplest grammars are creole grammars. *Linguistic Typology* 5: 121-166.
- Sampson G, Gil D, & Trudgill P. (eds.). 2009, *Language complexity as an evolving variable*. Oxford: Oxford University Press.
- Tomasello, M. 1999. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge: Harvard University Press.
- An interview with Guy Deutscher. (<http://www.americanscientist.org/bookshelf/pub/guy-deutscher>)

*野瀬昌彦 麗澤大学外国語学部助教。東北大学大学院博士課程修了・博士（文学）。主要論文は、“A Contrastive Study of Comparative Constructions in English, Japanese and Tok Pisin: Using Corpora in Cross-linguistic Contrast”. In: Xiao, Richard (ed.). 2010. *Using Corpora in Contrastive and Translation Studies*. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing: Chapter 21.